

戦争と教会

シリーズ・日本人と聖書

第12回

日清戦争(1894年)

- キリスト教会が反国家的・非愛国的でないことを試される事件
 - 「忠君愛国の思想がキリスト教徒にあるか無いか」
- 教会の指導者らは積極的に「**義戦論**」を展開
 - 本多庸一のように積極的に軍隊慰問にむかう者も
- カトリックも各教会が戦勝祈願のミサ
- 戦争反対論者も(植村正久)

日露戦争(1904年)

- キリスト教界はあけて戦争に協力した
 - YMCAは戦線慰問のために満州で天幕伝道
 - カトリック教会は従軍のための義捐金を募った
- 内村鑑三や柏木義円らは**非戦論**を唱えた
- メソジスト教会の総会決議(1907年)
 - 「聖書の教うる所により凡て有る所の権は皆神の立て給う所なるを信じ、**日本帝国に君臨し給う万世一系の天皇を奉戴し、国憲を重んじ国法に遵う。**」

三教合同(1912年)

- 政府の提唱により、神・仏・基の三教の会合
 - 家族国家論にもとづく国民教化の再編成と国家主義的政策の強化を図って企画されたもの
 - キ教は仏教と対等の立場を政府から与えられたが、**実質的には三教が国家神道のもとに従属させられたことを意味する**
- 三教代表は「**皇道を扶翼し益々国民道徳の振興を図る**」ことを決議
 - **天皇制的国民教化政策の一翼を担うことを確認**

次第に強まる思想統制

- 満州事変(昭和6年)を機に、侵略政策を擁護するため**現人神天皇**を中心にした家族国家観
- 上智大学学生**靖国神社参拝拒否**事件(7年)
 - カトリック信者の上智大学の予科生が参拝拒否
- 奄美大島外国人宣教師退去事件(12年)
 - 奄美大島のカトリック宣教師全員退去
- 特高による宗教手入れの強化(10年)

宗教団体法案

- 日中戦争(昭和12年)勃発、政府は宗教界に

キリスト教界はこの法案の成立を歓迎した

基督教連盟はこれによって「従来国民の各層に沈潜していた基督教に対する偏見や誤解は、自然解消せらるるであろう。」という見解を表明し、新聞各紙もまた、この法案が基督教にもっとも有用なものと認めていた。

- 正統たる我々が一月のことには認むと取つておる

ミッションとの断絶

- 昭和15年、救世軍幹部にスパイの嫌疑をかけて逮捕。政府はこれを口実に救世軍を本部ロンドンから離脱させ、軍隊模倣の組織呼称を「**日本救世団**」とさせた
- プロテスタント諸教派は外国のミッションとの関係を断ち切る必要に迫られた
- 日独伊三国同盟が調印され、英米系プロテスタント諸教会は「**敵性国家**」の**宗教**という烙印を押された

「日本基督教団」創設

- 皇紀二千六百年奉祝式典(昭和15年)
 - 青山学院にキリスト者2万人が集結
- プロテスタント34教派は「**日本基督教団**」(16年)に統合された
 - 教会は「非常時」国策の一機関として動員された
- 太平洋戦争開戦
 - 「日本国民たる基督者は国家に忠誠を誓い、国土防衛に努力し、進んで銃後奉公実施に万全を期す」

戦時下の教会

- 「天皇かキリストか」
- 反戦・殉教
 - ホーリネス教会系3教派の牧師96名は昭和17年6月に一斉検挙され、翌4月、これら3教派は274の教会が閉鎖・解散させられた
- 特別礼拝・祈祷
 - 皇室記念日の当日特別礼拝・月一回主題を皇室、帝国、一般国民のために祈る
- 神社参拝の「非宗教化」

靖国神社

- 軍国主義普及と戦争推進の精神的支柱
- 「戦争犠牲者の慰霊」ではなく「『英霊』の鎮魂と礼賛」
- 天皇陛下を中心に立派な日本をつくっていこうという大きな使命(靖国神社ホームページより)
 - 「靖国神社に祀られている神さま方(御祭神)は、すべて天皇陛下の大御心のように、永遠の平和を心から願いながら、日本を守るためにその尊い生命を国にささげられたのです。」

教会の主張

- 憲法改悪反対
 - 「集団的自衛権」の行使反対
- 公務としての靖国神社参拝反対
 - 政教分離を

そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」

<マタイ 26:52>